

メンターは小学校1年生 続 + 5つのステップ 1P

続：メンターは小学校1年生
～夢に現れた少年

+

社会貢献と好きで生きていく5つのステップ

ささ けんたろう

■ 自己紹介



名前：ささ けんたろう

1983年3月5日生まれ 北海道釧路出身

職業はなぞ。

まあ、どういう職業なのかはこの際、どうでもいいことです。僕はただ、自分のやりたいことがこれだと思ったとき、釧路ではそれが出来ないと悟り、何もない千葉にこしてきました（家出ですが）、でもおかげで多くのことを学び、そして今も学んでいます。あなたにこうして出会えたことにとても感謝しています。

■ 著作権に関する表記

本商材は、著作権法で保護された著作物にあたります。
本商材の取り扱いについては下記の点にご注意ください。
本商材の著作権は、執筆者である著作者にあります。
著作者の事前許可なく、本商材の一部または全部を無料・有料問わず印刷物、電子ファイル、ビデオ、音声、ホームページなどありとあらゆる手段により、複製、流用、転載、配布、公開、転売等することをすべて禁止します。

■ 使用許諾契約について

本契約は、本商材を購入した者（以下、甲とする）と著作者（以下、乙とする）との間で合意した契約です。
本商材を受け取ることにより、この契約は成立します。

第一条 契約の目的

本契約は、本商材に含まれる情報を、本契約に基づき、甲が非独占的に使用する権利を承諾するものとする。

第二条 第三者への公開の禁止

甲は本商材の一部または全部を、いかなる手段によっても第三者に公開・配布することはできない。

第三条 契約解除

甲が本契約に違反した場合、乙はいつでもこの使用許

諾契約を解除することができる。

第四条 損害賠償

甲が本契約の第二条の規定に違反した場合、本契約の解除に関わらず、甲は乙に対し、違約金として、違反件数と違反行為時の販売価格を乗じた価格の10倍の金額を支払うものとする。

第五条 責任

本商材はこれまでの経験をもとに作成したもので、成功を保証するものではない。

本商材の情報によっていかなる損害が生じた場合においても乙は一切の責任を負うものではない。

成功も失敗も失態も含めて書いているのでぜひ、ここから生きることをつかんでもらいたい。

著作権のことは触れていますが、あなたがこの文章を通して感動した場合、ぜひこれをあなたの手によってお伝え下さい。そのときに伝える文章は例文ですが、こちらにあります。こちらをそのままコピーして配布してもかまいません。

僕としては出来る限りあなたの身近で困っている、悩んでいる人に対してこれを読んでいただくことで、何かに気づいていただけたらありがたいと思っています。

もしあなたの身近に困っている人がいたら

ぜひこれを配布してあげていただくと、ありがたいです。

さて、今回は誰の中にもある「富・豊か」の部分について語りたと思っています。人間、よくこういう悩みが尽きませんよね。

- お金がない、売上げがない
- 周りから無視されて、職場の環境が辛い
- 自分は愛されていない、死にたい
- 体が辛い、苦しい、心も辛い
- 本当はやりたいことがあるのに、怖くて出来ない

これらは全て、ある**共通点**があります。

あなたはその共通点の正体がわかりますか??

もしわかりましたら、これは読み物として読んでいただき、身近に困っている人、上記の悩みで困っている人がいたら、それを渡していただければありがたいです。

もしわからない方はお読みいただくと、あなたの中にある●●を取り除くきっかけになり、豊かな道を進むこと

になります。

ただし、それをするかしないかの選択はあなたにあります。そこを選ぶかどうか？

あなたにゆだねられているのは、●●を取り除く道を選ぶか、●●を持ったままいきるのか？

実際、●●を捨てるというのはとても怖いのです。何しろ今までの自分がある意味否定するものだから。でもこの最大のゴミを捨てないと、同時に成長できないのも事実です。僕は自由業ということでインターネットビジネスを通してコンサルタント、そして作家をさせていただいております。時々いろんなところに出没したり、変なことばかりやっては痛い目にあっています。

その中でたくさんのクライアントとお話してわかったことがあります。

それは成果の出る人は紛れもなく、●●を仕事にしている人、そしてお金についてほとんど心配していない人です。社会的ミッションを基準に仕事をしているというこ

とですね。

一方成果でない人は自分の●●がわかっているけど、目先の生活に追われて本来の自分を先延ばしにしている人です。大多数の人が●●といった根本的なところよりも、目先の生活に追われています。

実は僕もその状態だったのでわかるのですが、目先の生活を追いかけても豊かになれません。一時的になれたとしても、また不安が襲ってくるのです。

会社が辛くてやめたい、独立したいという気持ちを持っている人は多いけれど、大概そういうのが出来ないというのはこの心理メカニズムからくるものです。

あなたにとって今までの生活を捨てて新しい道に踏み込むというのは最大の試練です。そしてその試練はある意味断崖絶壁を落ちるようなものです。というか落ちなければならぬのです。

そして落ちた先は死だと思ったら、違うのです。ここではあなたが「富」を引き出すために必要な考えを

お話として語っています。

登場人物は

僕：あなたです。そしてモデルは僕でございます。

拓海：たくみくん。僕のメンターです。といっても、彼がいなければ僕は今頃、こういう世界に足を運んでいなかったでしょう。彼は2009年現在は小学校4年生だったはず（当時出会った時は小学校1年生でした）（拓海君の会話は青文字にしています）

拓海君は僕よりもずっと年下なのですが、人生の先生です。もう一度書きますが、彼がないければ、今頃僕はそこらで普通に生活を送っていたでしょう。

僕の奥底にある本来の道と呼び覚ましてくれたのか彼との出会いでした。ということで、将来拓海君がこの作品を読んでくれることを期待しつつ、あなたにも「富」の持ち方についてお伝えしていきます。

それではスタートします。

■ 不安の正体は……

僕はとても不安な夜をすごしていた。残り金額、全財産2円。そしてこれからどうやって生活していけばいいのだろう。幸い、パソコンといった電気、水道、ガスはあるから何とか暮らしていけるものの、家賃は払えない、電話代金も払えず、ストップされている、そして何よりも自転車も靴もぼろぼろで、自分の心がすでにこういう状態だった。

「どうして自分がこんな目にあわなくてはならないのだろう？ どういう悪いことをしたからこんな目にあっただろう？ 僕は悪い子なんだよなあ」

僕はおなかをすかせたまま、寝ることにした。寝る以外方法がないからだ。パソコンで文章を打ち込んでも、出てくるのは「お前は無能な人間だ」「もうだめだ、もうだめだ、もうおしまいだ」という言葉ばかり。自分をのろいたくなった、自分を殺したくなった。でも、自殺する勇気なんてない。そうやって頭をがりがりとかいていても請求書だけはどんどんとたまっていく。

僕は寝ることにして、目を閉じた。途中、悔しくて涙が出てきた。といってもその涙すら出てこない。心が泣いているのだ。仕事先を探しても、携帯電話が繋がらな

いということで採用を落とされて、面接場所を求めても、全てが電車でないといけないところばかりで、しかも面接を受けたとしてもなぜか落とされる。履歴書不要のところですら!!

全てが絶望だった。なんだかこういう人生を味わうために自分は生きてきたのだろうか??

と、僕の前に一人の男の子が現れた。その子はかつて僕に本来の道に進むことを教えてくれた拓海君だった。いや、拓海君の姿を見て、僕は本来の自分のまま、あるがままの自分で生きていこうと決意したんだった。彼は当時小学校1年生だったけれど、今は元気でやっているだろうか??

「お兄ちゃん、何落ち込んでいるの」

「いや、落ち込んでいないよ」

と、夢の中? で僕は言った。どういうわけか夢なのに自分の意識がはっきりしている。

「悪いけれど、ぼくにはお見通しだよ。お兄ちゃんが落ち込んでいるのは」

「ははは、ばれたら仕方ないか。といっても君にわかるかどうか」

「わかるよ、だってお兄ちゃんの悩みはぼくの悩みだから」

「どういうことだい？」

僕は拓海に言った。

「人間の悩みってその悩みを聞いたらたとえ他人の悩みであっても、それは自分の悩みにもなるんだよ。だって意識の上じゃみんなつながっているんだから」

「うーん、ということは僕の喜びは拓海の喜びってことに」

「それがつながっているという証拠だよ。お兄ちゃんがうれしいことはぼくにとってもうれしいことなんだ。逆にお兄ちゃんが悲しいことはぼくにとっても悲しいことなんだ」

「そうなのか……悪かった、落ち込んだ顔して」

「いや、いいんだよ。ぼくはお兄ちゃんに元気になってもらいたいから。でね、お兄ちゃんに今日、伝えることがあって夢に出てきたんだ」

「そうなのか」

「うん、だからお兄ちゃんは今、夢の中だけれどはっきりとしているはずだよ」

「そういわれれば、おかしい感じはするけれど、何かうれしいというか」

「うんうん、ぼくもうれしいもの」

と、拓海は指をパチンと鳴らした。すると目の前にコー

ヒーが出てくる。

「飲もうよ」

「うん」

と、僕はコーヒーをすすった。本当に熱く、温かい味がする。

「さてお兄ちゃん、お兄ちゃんがどうして今、ものすごく不安定な状態なのか、わかる？」

「うーん、売り上げ落ちたりするのはやはり自分のメッセージを伝えていないからなのかな」

「それもあるけれど……**本質**はもっと違うところにあるよ。お兄ちゃんのその考えそのものが、不安定な状態を呼んでいるんだよ」

「といっても、言葉ではわかるけれど、まったく理解できないんだ、そこ」

と、僕はコーヒーを飲み干した。するとすぐにお変わりが出てくる。

「お兄ちゃんの考えそのものが不安定な状態を呼ぶ。で、お兄ちゃんはそれ、**怖さを前提**にして動いているんだよ。お兄ちゃんが幸せになるなら、**愛を前提**にして動

かないと」

「それ、どうやったら愛を前提にして動くんだ？」

「まず、その前に怖さをわかっておかないといけないね。だって、怖いものの正体をつかまないと愛のおりに動いたって、怖いことばかりだもん。『恐怖』から来ていると自分でわからない限り、いつまでたっても同じところをぐるぐる回るから」

「そうか……じゃあ僕は怖さを前提にして動いていたんだな」

「うん、それがわかっただけでも一歩前に進んだことになるね、おめでとう」

「あ、ありがとう」

拓海は相変わらずにヒヒと笑う、そこは昔と変わらない。

「さて、怖さについて語るけれど、怖さの正体って何だと思う？ たとえば砂漠に投げ出されたとき、人間がまず思うことって何だと思う？」

「え、暑い？」

「それもあるけれど、もっと言うと砂漠は何もない状態。だからそこであるのは枯れるということ。枯れる（枯渴）こそが、怖さの正体なんだ」

「枯渴が怖さの正体」

「そう、売り上げだって落ちて怖くなるのも、売り上げが落ちると利益が入らない、すなわちお金が入らなくなり、枯渴した考えを持つようになる。もうお金はどこから

も入ってこないって。実際は色々と入ってくるのに、自分でそう決め付けてしまっている」

「あ、ああ」

僕はちょっとわかった気がした。で、それを振り返るととても恥ずかしくなった。なぜなら自分がそうだったからだ。

「もしお兄ちゃんがその考えを持っていたら、早いうちに手放したほうがいい。すなわち、お金は決まったところから入ってくるのでなく、いたるところから入ってくる。天気で言うところの雨と同じだよ。雨は日本という国だったら例外なくどこでも降っている。その考えを持っているかどうかで、これからの人生はかなり違ってくる」

「確かに、言われるとそうだよな。でも頭じゃわかっているんだけど、なかなか心に落とすのが難しいな」

「うん、だからこの考えを持って受け入れられないときは、これを受け入れるがごとく、そういう出来事がやってくる。そして体全てで理解できて、初めてそういう出来事が終わる」

「どういうことだい？」

僕はまたコーヒーを飲み干した。

「たとえばいじめられていたとするよね」

「うん」

「そのとき、転校してもいじめられる子というのは共通点がある。それは何だと思う？」

「さ、さあ」

「ちょっとは考えてみてよ」

「う、うん」

拓海はこういうところが上手だ、すなわち質問するよう
にして僕に答えを出させるようにしている。

「やはりおどおどしているからなのかな」

「それだったらおどおどしているけれど、いじめる子も
いるよ」

「うーん、だったらいじめられるように出来ている子か
な」

「それってどういう子？」

「うーん、いじめてくださいって叫んでいる子」

「そうだよ」

「え、そうなの？」

僕はびっくりした。まさかあてずっぽうで言ったのだが、
それが本当にそうなるとは。

「だから本当にいじめられる子の本質はいじめてくださ
いって心から叫んでいる子、そしてもう一つは自分がい
じめられていて、なんとかしたいとしても、動かない子。
というか何をしたらいいのかわからない子だね。いや、
実際は親に言えば、あるいは先生に言ったりと自分から
動けばいいんだけど、それをしないでただ、黙ってい
る」

「ははは、僕じゃないか」

「お兄ちゃんをぼくは遠くから見ていたけれど、そうい
うときがあったはずだよ」

「あ、ああ」

それは僕が人からお金を借りると決めたとき、いじめら
れていたときの記憶を呼び起こしたのだ。

かつていじめを受けていた僕は誰かに相談したくてたま
らなかった。というか親に相談しようとは何度も思った。で
も僕の中でそれはいじめじゃないということを認めなかつ
たことが一つ。人に言うくらいなら自殺したほうがましだ
と思っていたことがもう一つ。どっちにしろ人に言うという
ことをしなかったのだ。そのときの記憶が否応なく思い
出される。

「お兄ちゃん、そのときはどうだった」

「いやあ、辛い何の。本当に地獄だったよ」

「でしょ、で、お兄ちゃんは地獄ばかり味わっている。それはどうしてだと思っ？」

「運命だから？」

「お兄ちゃんが決めたことだよ、そういう風に味わうというのは。いや、正確に言うとお兄ちゃんが決めた運命とは言いがたいけれどね」

「どういうことだい？」

僕は今度、アイスコーヒーを注文した。

「お兄ちゃんが辛いものを手放さないと、過去と決別しないと、いつまでたっても同じ状態が繰り返されるってことだよ。本質は変わっていないんだ。いじめもお金を借りるのも解決策はどちらも同じってことになる」

「あ、ああ」

「すなわち、人に相談する」

「う、うん。確かにいじめられていたときもあの時、勇気を振り絞ればよかったのに、出来なかった。で、人からお金を借りるときにものすごく勇気があった。で、実際にいえたときいじめという言葉が消え去ったよ」

「だから、お兄ちゃんが今、抱えているものは全て過去の**記憶**が引き起こしていて、それが未解決状態にいること」

「じゃあ、お金がない生活もか？」

「うん、根本はそこだね。もちろんお金を稼ぐような行為をしていないというのも問題だけれど、でもお兄ちゃんはお金がないから、原因

は別のところにある」

「それがわかったら解決するのかな？」

「そういう状態を引き起こしているのは心だからね。だから、心が原点となって、実際に外側の世界に出てくる。お兄ちゃんの心に焦点をあてていこう。そうしないといつまでたってもお兄ちゃんは苦しいまま一生を終えてしまいそうだから」

「すまない、拓海」

「いいんだよ、将来お兄ちゃんに会うために今、こうして夢の中でしゃべっているんだから。お兄ちゃんの中にある枯れた意識を消すのがぼくの役目だからさ」

「ありがとう、じゃあ俺の役目は……お前を楽しい道に引き連れることだな」

「うん、そのときは頼むね」

こうして僕はぱっと目が覚めた。

外はザーザーの大雨だった。

まるで自分の涙を流してくれている、そんな感じだった。

「僕はこれから生活できるのだろうか？ ホームレスでも何でも生活できるのだろうか？ 奇跡が起きてくれればなあ……」

僕はもう祈るものが神様しかなかった。
しかし、夢の中の自分にも期待していた。

『本当にいい夢だった』

※ 恐怖の正体は枯渇意識である

■ 富を生み出すために

また、僕は夜になって寝た。今日はおにぎり一個だけ。おにぎりというのがこんなに美味しいものだとは思わなかった。おなかを極限まで減らして初めて食べるおにぎり。実はおにぎりを食べることが出来たのは道端で100円を拾ったからだ。それで晩飯をまかなくなったのだ。

夢を見た。また拓海が出てきた。

「お兄ちゃん、ども」

「ども、拓海」

「お兄ちゃんは今日、何かいいことがあった？」

「道端で100円拾ったよ」

「そりゃよかった。お兄ちゃんはお金に恵まれるね」

「どうして？」

僕は言った。だってお金がすっからかなのに。

「多くのお金が落ちていることにすら気づけなかった。でもお兄ちゃんは気づいた。これってすごいことだよ。だってさ、お兄ちゃん、人の悩みをわかることが出来る人間なんだから」

「それと悩みがどうつながるんだい？」

「人の悩みを解決することは、道端に落ちている100円を拾うのと同じことだよ。要は多くの人が気づかないところを気づくことが出来る力を意味するんだ」

僕は恥ずかしくなった。自分は人を理解するに値しない人間だ。もし理解できたらセールスしてバカ売れしているはずだから。

「何もお買い上げしてもらおうことが理解するってことじゃないよ、人の痛みを共に味わって、そこで解決できる人間、それが理解するってことだよ」

「今、俺の心」

「うん、夢だからまる聞こえだよ」

「ははは」

僕は力なく笑った。

「さて、今日は豊かさを根本的にどこから生み出すのかについてお話ししよう。いっておくけれど、これはぼくがしゃべっているのではなく、ぼくの中の誰かがお兄ちゃんにお伝えしていることだからね」

「うん、そこは作家だからわかる。僕も自分の考えなんて入れていないし、いれても変な文章になるからさ。僕を通して誰かに書かせていただいているというほうが正しいよね」

「うん、そこはわかってよかった。ではいくよ」

「ああ、お願い」

と、僕はまたコーヒーを飲み始めた。

「お兄ちゃんの豊かなことは好きなことだよ」

「どういうことなんだ？」

僕は問いかけると、拓海はジュースを飲み始めた。

「お兄ちゃんの豊かな心は全て、お兄ちゃんがはじめからわかっているということ。で、好きなことは周りからとめられても勝手にやってしまう。だから、それが好きなことなんだ。人から強制されてやることは好きなことじゃない。嫌いなことだし、仕方ないか……という気持ちでやっている。好きなことが社会貢献になるんだって考えを持てば、仕事も何もかも全力で打ち込めることが出来るのにね」

「拓海……すごいこというなあ。俺、そういう意識なかったよ」

「どういう意識？」

「仕事が社会貢献になるって意識。仕事はあくまでも稼ぐための手段だと思っていたからさ」

「そういう風に考えると、どんなアイデアも『稼ぐだけの手段』でしかありませんし、好きなことも『稼ぐだけの手段』でしかなくなる。好きなことが社会貢献になるのに、その方法を知らないだけで多くの方はさまよって

いる。お兄ちゃん、あるがままに生きていないね」

拓海のその一言に僕はぐさっと来た。確かに言われてみればそうだ。目の前の生活ばかり気にして、好きなことにはほとんど見向きもしなかった自分がいる。

「でも、好きなことやっても収入にならないし、それに目の前の生活に追われて、というか、目の前のお金すらないのに」

「それがお兄ちゃんの根本、枯渇意識を手放していない証拠だよ」

「枯渇意識……か。そういえば昨日も言っていたよな」

「うん、人間は一度じゃ理解できないのは知っているから、お兄ちゃんが枯渇意識を手放さない限り、枯渇意識になる出来事を呼んでしまうようになる。お兄ちゃんに全てはかかっているんだよ」

「そうか、よく言うよな、全ての原因は自分自身にあるって」

「うん、それも自分の心が枯渇か自然の流れに向かっているかどうかで変わってくるからね。たとえお兄ちゃんが豊かでも、周りが枯渇意識を持っていたら、お兄ちゃんも枯渇意識になってしまうし、豊かな自然意識に任せたら自然とそっちに向かうようになる。人生って本当に単純だよ」

「確かに言葉で言われたらそうだよね」

僕はちょっと投げやりな気持ちで答えた。そういえば地元を抜け出した最大の理由って、周りがそういう人たちで囲まれているのがわかって、それが嫌だから抜け出したんじゃないかって。ふっと僕は思い出した。

どういうわけか知らないけれど、携帯電話がストップされていて、誰とも通話が出来ない状態がありがたいと思うようになった。なぜかはわからない。拓海はちゃかちゃかとストローを回す。

「人生は単純だから、商売も単純だし、人間関係も単純。そして単純の意味がわかったものから次々と奇跡と呼ばれることが起きるようになる。逆に枯渇しているときの人間の考えは複雑で、商売も複雑。人間関係も複雑。だから今いる場所は自分の意識が反映された場所で、複雑と感じたら、自分の心そのものが複雑なんだってことを教えてくれる。恐怖ってのはただ、教えてくれているんだ。このしがらみは全てお兄ちゃんの心にあるから、それを解いてくださいって。でも、多く人は周りが変われば……と思っている。そういう気持ちじゃいつまでたっても変わらない。自分は変わろうとしないで周りが変わること期待しているんだから」

「それは痛いなあ」

僕は力なく笑った。それが当てはまることたくさんあるから。たとえば、僕がいじめられていたとき、自分を変えようとしなくていじめている連中がいなくなればいい

のになあと思っていた。でも実際は変わらなかった。

「お兄ちゃんはすでにわかっているようだね」

「ああ、本当に情けない気持ちでいっぱいだ」

「いや、その情けない気持ちはとことん味わうといいよ。

中途半端になるから、いつまでたっても同じ状態が繰り返される。嫌な気持ちはとことん骨の髄まで味わいつくしておくことで、本当に死にたくなることがある。で、それをさようなら~したら、もうその気持ちを克服するだけでなく、嫌な気持ちすらなくなるってことさ」

「なるほどなあ……確かにいじめられたときの気持ちを人からお金を借りるときにとことん味わいつくしたからなあ……」

「うん、そういうことをきちんと客観的に見れるようになると、もうそういう問題が起こらないようになってくる。起こっているのは自分の中の記憶が引き金となって起こしているだけだからね」

「ははは、ヒューレン博士みたいなこというなあ」

「ヒューレン博士って？ その人、楽しいの？」

拓海はぐいっと僕に顔を近づける。

「楽しいと思うよ、実際にあってみたいし」

「どうして？」

「だって、その人に会うと癒されそうというか……」

「お兄ちゃん、実際にお兄ちゃんも好きなことを仕事にして、そういう人間になればいいんじゃないの？」

「拓海……」

僕は息を呑んだ。そういう発想はなかったから。拓海は話を続ける。

「お兄ちゃんは好きなこととして生きる権利はあるんだよ。というか人間最高に幸せって感じるのはどういうときだと思う？」

「さあ……」

「それはね、**何もない時**なんだよ」

「どういうことだい？」

「幸せってのは、**何もおきないときと感じているときが最も幸せ**なんだよ。お兄ちゃんは今、お金のことでとても苦しんでいる。で、実際にお金の問題が全て解決されたとしたらどうなると思う？」

「そういわれると……何も感じなくなるな」

「それが幸せだよ、**要は幸せを感じるために不幸が起こる。不幸は幸せに気づくチャンスであり、同時に自分を振り返って前に進むためのチャンスでもあるんだよ**」

「言われるとそうだけれど、でも受け入れるのは」

「時間がかかるよ～～」

拓海はぐいっとジュースを飲み干した。

そしておかわりをする。

「じゃあここで富を生み出すための話に戻そうよ」

「う、うん」

「富を生み出すためには好きなことをする。それはもう
いったね。どうして好きなことをすると富が出るのか？

それはとっても簡単。富はどこからでもやってくるからだ
よ」

「それはどういうことなんだ？ お金もどこからでもやっ
てくるというのか？」

「うん、その前に一つ注意しないといけないことがある
んだ。富ってみんなお金を意識するけれど、こうやって
お兄ちゃんと話をしていることも『富』なんだからね」

「ど、どういうこと？」

僕はコーヒーのお変わり、今度はエスプレッソを飲む。

「多くのお金しか目を向けられないけれど、周りから愛
されていることも富の一つだし、お金も富の一つだし、
そして今、生きていることも富の一つだよ。お兄ちゃんの
いる場所ですら富なんだ。というか全て富に囲まれてい
るんだよ、すでに」

「でも、僕はお金がなくて」

「それが枯渇だよ、枯渇意識のもう一つの特徴はこだ
わりすぎること」

「こだわりすぎる？」

「うん、人間はたいした力がないんだよ。それにこだ

わっているから本来やりたいことを見失ってしまう。生活ばかり見るのもこだわりすぎて、それ以外のものを見失うからだよ。ぼくからみるとお兄ちゃんはお金という欲望の塊にしかみえないよ」

「欲望の塊ね……」

ちょっと泣きたくなった。僕は欲望の塊とはっきり言われたからだ。

「落ち込まないの、そういわないとはっきりわからなかったんだから」

「そうだけれど、どうしたら」

「だから好きなことをする。好きなことってどのくらいすごいかわかる？」

「いや」

「好きなことをやるって、すでに持っている富を生み出して広めることなんだよ」

「そこがよくわからないなあ。僕は文章を書いたり、とか妄想を人に伝えるのが好きなんだけれど、それがどういう富につながるんだい？」

「お兄ちゃんは好きなこと大体わかっている。けれども多く人は好きなことすら何かわかっていない。日々の仕事に追われて、好きなことを見つける、打ち込むということをしない。多く人は楽しいを基準にしていないで、ただ生活のことに基準を当てている。あるがままに生きるなら楽しいかつ、好きなことで生活していくことが大切なんだ」

「でも、それで生活できない人もたくさんいるよな。割り切って生活しているというか」

僕はいつの間にか拓海に否定的なことをはいていることに気がついた。

「それは彼らが富をうまく使っていないからだよ。富は必ずしも好きなことだけではないし、お金だけでもない。限定してしまったらそれは富じゃない。人間だろうが家だろうが、全て富なんだ、富はしまっておいても意味がない。使うことでますます輝いていくんだ。お兄ちゃんだって、妄想を自分ひとりで溜め込んでいるよりも、実際に書いて読んでもらったほうがうれしいでしょ」

「うん、確かに……この前さ、自分の書いた作品を出版社に持ち込んだらもう少しで作家として書店販売できると評価をいただいたよ」

「一人で考えているよりも世間に広めたほうが楽しかったよね」

「そうだね、色々と自分でダメだと思っていたことでも回りから見るとそうじゃないって事に気づけたから」

「それだよ、それが富の源泉だよ。お兄ちゃん。これから富を本当に得るなら、**最初から全て富に囲まれていることに気づくこと**。どんなに現状が枯渇に見えても、実際は富に囲まれているんだからね。そういう意識を前提として持つておくことだよ」

「でもそれを持つのは難しいのでは？」

「お兄ちゃん、いいこと教えてあげようか？」

「う、うん」

僕はコーヒーのお変わりをする。

「お兄ちゃん、富とは何かを心でつかまない限り、それを学ぶかのような出来事が次々とやってくるんだよ。

お兄ちゃんが今、ドン底生活をしているのも、一言で言えばお兄ちゃんが富を学ぶため。富と逆の枯渇とはどういう状態なのか、どういうことなのかを今、学んでいるからなんだ」

「うーん、なるほど……」

僕はいまひとつわからなかった。これが枯渇状態で僕はそれを学んでいるのかということに。

「お兄ちゃん、今はわからなくても社会がきちんと教えてくれるよ。だからお兄ちゃんは富がわかったら全ては富に囲まれていることを前提で生きてみな。そしたらそういうのが当たり前意識になってきたら、そういう状態が本当に当たり前のようにやってくるから」

「うん、ありがとう。でも」

「あ、あとね」

「うん」

拓海が目ギラリと光る。

「『でも』って言葉は枯渇から来ていることを意識してほしいんだ」

「え」

「人間っていいことほど否定したくなるもの。だから多くの人は枯渇意識を受け入れて生きている。でも豊かな意識を持つ人は否定なんてことは言わないし、使わない。どんなに生活が苦しくても否定的な言葉は入れないし、受け入れて生きる。お兄ちゃんは今二つの道が残された、一つは枯渇意識で生きていくか？ もう一つは豊かな意識で生きていくか？ お兄ちゃんはどっちがいいの？」

僕はちょっとだけ考えた。枯渇意識を整理すると目の前の生活に追われて生きることだ。豊かな意識で生きるというのは好きなことをやることだけれど、生活と将来の保障がない。

「世の中はお兄ちゃんの頭で思っているほどうまく出来ていないよ、というかいい意味でも悪い意味でも思い通りにならない。この意味、わかる？」

拓海はそう言って、ジュースをまた頼んだ。

「どういうことだ？」

「お兄ちゃん、たとえば宝くじを買ったとするよね。そのとき1億円があたったらいいなって思ったことある？」

「ある」

「じゃあもう一つ、お兄ちゃんが今のままの生活が続いて、ホームレスになったとする。そういう状態になりたい？」

「なりたくない……でも心の法則だとなりたくないものほど意識を向けるからなるって言うよな」

「予言と同じだよ。お兄ちゃん。予言はあくまでも起こる可能性があるから用心しておけてことであって、実際におきるかどうかは当日にならないとわからない」

「う、うん、確かにそうだな」

「でね、実際におきないこともあるけれど、自分の頭じゃおきることになっているんだよなあ～～ここが人間としての問題だと思っているよ」

「ほお、それはどういうこと？」

「だから、実際はそうならない現実もあるのに、自分であんなになってしまうんだ、あんなになってしまうんだ……って執着しすぎるから、そのとおりに近い状態がやってくる。でもね、覚えておいたほうがいいよ」

「ああ」

「世の中はいい意味でも悪い意味でも思い通りにならない。だからこそ、未来はどうなるかわからない。9割がたはどうなるか予想できるけれど、残り1割がブラックボックスだから、その1割は必ずといっていいほど、お

兄ちゃんにとって好都合な展開を用意している。だからその展開に足を運んだときに本当に奇跡が押し寄せてくる」

「へえ、奇跡か」

「でもね、奇跡の正体ってとっても簡単でさ、奇跡はお兄ちゃんが止めていたストッパーをはずした結果だよ」

「ほお、また難しいこというなあ」

「簡単なことだよ。好きなことをする。そしてそれを人に見てもらおう。相手がどんな評価を下そうと関係ない。ただ、自分の好きなことはそれこそ命を懸けて情熱をかけて行う。そしてそれが社会貢献になるんだという意味を持って取り組む。その熱意は必ず一人の人間に通じる。そしたらその人間がお兄ちゃんに奇跡をもたらすようになる」

「うーん、観念的だけれど」

「お兄ちゃんはその常識を捨てないと先に進めないね。世の中はお兄ちゃんが考えているシナリオよりももっとすばらしいんだよ。どんなこともお兄ちゃんは教えてもらっているだけ。その教えの本質に気がついたら、ごほうびがくる。それも自分の知らない形でさ」

「そうなのか」

「うん、そういうものだよ。ま、お兄ちゃんはまだ好きなことに向き合うことだね」

※ **好きなことが富を生み出す**

■ 意識を明らかにする

拓海と僕の話はまだ続く。

「お兄ちゃん、好きなことわかっているよね」

「ああ、僕の場合は妄想を伝えることだからな」

「まあ、わからない人のためにいっておくけれど、子供時代、何が好きだったのか？ その好きだったものはどういう意味があったのか？ そこを見出せばいいんだよね」

「というと？」

僕は一応聞いた、答えはわかっているけれど。

「たとえばママごとが好きなら、ママごとそのものが好きなのでなく、ママごとを通して何が喜びなのかを見つけることだよ」

「ああ、そういうことか」

「後もう一つ、好きがわからなければ仕事でほめられたこと、感謝されたことを思い出すといいよね。そしたら自分がほめられるときはどういうときなのかがわかるから」

「そうだな」

「感謝されたことは自分にとってどういう意味をもたらすのか？ それがわかれば好きなことになる。世の中とっても簡単だね」

「その簡単を見つけるのが難しいけれどな」

「後もう一つはその簡単なことを認めること。実はここができるかどうかで、本当に人生が変わってくるようになる。お兄ちゃんにとって今必要なのはこの部分だよ」

「というと？」

拓海は歩き出した。

「お兄ちゃんが必要なのは、好きなことをして社会貢献するって気持ちを出したときに出てくる否定的な自分。たとえば『明日の生活どうする？』だったり『好きなことで生活するのはやめなさい』といった生活だったり、そういうものを全て思い込みとして手放していくこと。これができるかどうかで、本当に意識がはっきりしたら、富の本質がわかるようになり、人生は流れに身をゆだねることになる」

「それはまさに今の自分そのものですな」

僕は座ってばかりいると疲れるので運動することにした。

「人間は誰もが枯渇意識を持っている。特にお兄ちゃんのようにすっからかんな人生を送ったらその度合いが強くなる。でもそういうときこそお兄ちゃんにとって最大のチャンスなんだ。お兄ちゃんがそういう状態になるということは何でも貪欲に向かって成長しようとしている。そういう人に教えると、その人はうまくいくようになる。しかし、**今のお兄ちゃんのようにどん底にいながらもいまだに自分の考えに縛られていたら、うまくいかない、そもそも自分の考えそのものが古いハードディスクそのものなんだからね**」

「なるほど、それは思い当たることがあるよ。僕はとっても稼いでいる人の脳みそでこの状態をみたらどうなるんだろうってことを実験的にやってみたんだ。そしたら面白いことに悩んでいることが一気に吹っ飛んだ」

「そういうもんだよ、お兄ちゃん。億万長者の意識もそうでない人の意識も共有できるんだ。つながっているから。だから、**お兄ちゃんは回りに振り回されないで、積極的にこの人は!** という人を丸ごとダウンロードしていけばいいんだよ」

「丸ごとダウンロードといってもどうやるんだ?」

「**その人の商品を買う、その人の情報を読んで、自分もそういう考えなんだということを取り入れる、反論しない。** たったこれだけだよ。でも、自分の意識があると反論してしまう。反論するからいつまでたってもダウンロードが中途半端になってしまう。古いハードディスクを入れ

た状態が現在なのにね」

「ということは……僕は古いハードディスクを埋めたまま
ま生きているってことなの？」

「そうだよ、よくわかったねえ」

拓海は手をたたいた。

「ははは、そりゃこういう考えだもの、いつまでたっても
同じところをぐるぐる回りしていたよな」

「でも、お兄ちゃんは徹底的に追い詰められないとそう
いう状態を学ぶことが出来なかった。だからお兄ちゃんとして
はこの状態こそが最もベストな状態なんだ。どうたい？」

これを受け入れるようになったらお兄ちゃんのいる環境
は最も最高の環境だと思えるんだけれどな」

「うーん、今はまだ若干受け入れられない自分がある
な」

「そしたらそれを受け入れるべき日が必ず来る。その
ときに受け入れたらいいよ。それはある意味客観的に見
ると最大の不幸となって襲ってくる。でもその日に気づい
たときが人生再スタートになるから、それは受け入れる
んだよ。拒否したらますます受け入れなければならない
出来事が襲ってくるから」

「あ、ああ」

僕は不幸な出来事ということにぶるっとした。しかし、

それを受け入れたら強くなる、人間はそういう風に出来ているのだろうか。

「出来ているよ、お兄ちゃん、心が豊かだと貧しいことはもう起こらない。貧しさはまず、心からおきてそして体、外側に発展するんだ。お兄ちゃんの中にある貧しさを徹底的に追い出してけば、入ってくるのは豊かなものしかなくなる。たったそれだけだよ」

「そうか、ありがとうな」

「いやいや、これはぼくの見解でなく、ぼくはただ言わせられているだけだから。ところで、意識をはっきりするために必要なことを言うよ」

「うん」

「お兄ちゃんはどうしてお金、売りにこたわっているの？」

拓海の質問に僕はちょっと考えてしまった。どうしてこたわっているといわれても生きるためじゃないか。

「生きるためじゃないか」

「じゃあ、こういう質問をするよ。売りをあげる、お金を上げるといっているのは実はお兄ちゃんが本当に求めているものじゃないんだ。本当に求めているのはその下、すなわち心にあるんだ。お兄ちゃんが売りにこたわって、お金を追い求める本当の意味って何？ 心に問いかけてみて？ そして出てきた答え、否定的な言葉、肯定的なもの全て

をノートに書き出してみよ」

拓海はわくわくしながら僕を見ている。僕の目の前に万年筆とノートが現れた。そしてそれを書く。

「うーん、どうしてって言われてもお金がほしいのは、生活費を稼ぐため、貧乏にならないため、ホームレスになりたくない、お金があれば好きなものが食べられる。惨めにならない、豊かな生活、自由を満喫できる、好きなことを毎日出来て可能性が広がる」

「お兄ちゃん、お金に対してどういう感情を持っている？
どういうことを考えている、好きなことを書いて」

拓海はまるでとあるメンターのように大きく静かに語りかけた。

「自分は億万長者になる資格がない、自分は百万円千万円稼ぐ自信がない、それすら得る権利がない、生活が苦しい、この生活を何とかしたい。もっといろんなところにいって、豊かさを満喫したい、周りに迷惑をかけたくない、好きなときに好きな場所に向かいたい、ビジネスで成功したい……」

色々と僕は書いていった。そして数時間たっただろうか？
僕はあることを書いたときにひらめいた。というかおなかのそこから大きく力が入るような、輝いたといったほうがいいのだろうか？ 何かぐぐっと力が入る。

「惨めな生活を二度としたくない、自由な生活、自由に生きてあるがままに生きて生活したい」

と、書いたときに……なんだか心がすっきりしてきた。それと同時におなかが一気にぐううとなりだした。

「うはあ、どういうことなんだろう。すっきりしてきたわ」

「うん、だったらそれがお兄ちゃんにとって本当にお金を求めている理由になるね。要は自由になりたい。そういうところを見出したんだ。だったらお兄ちゃんは**今から自由を行動に移さないといけなくなる**」

「とってもどういう状態が自由なのか……。お金はないし、それで自由を満喫できるのか」

「**外側で何が起きていようが関係ないよ**。大切なのは自分の心の内側だよ。**心の内側ですでに自由なら、外側もすでに自由なんだ**。心の内側で縛っているものがあるから、いつまでも不自由になっている。その縛っている意識を見つけて後は手放していけばいいんだ。お兄ちゃんが持っている不自由は何かな？」

僕は考える間もなく

「借金」

と、答えた。

「だったら借金をとことんしまくっている自分を味わってみて」

と、拓海は言った。

僕は想像した、というか、想像しなくても出来るのだが。

「お兄ちゃん、今、どんな状態？」

「とっても最悪で、もう申し訳ないことこの上ない気持ちでいっぱいだ」

「それでいいんだよ。借金という現象が引き起こしている心の本質は『最悪で申し訳ないことこの上ない』気持ちなんだから。それがわかったら後は手放すだけだよ」

「どうやって手放すんだい？」

僕は拓海の間を見ていった。拓海はふっふっふ〜と笑う。

「まず、本質は『最悪で申し訳ないことこの上ない』という意識を自分の中で何度も再生していること。大概借金していてもこういうところに気がつかない人多いからね。」

だから、気づいたから次にすることは**まず、自分の力のなさとその無力感を認めることだよ**。お兄ちゃん、自分は『最悪で申し訳ないことをしている』ってこと、認めることができる？」

「それは……」

僕はちょっとためらった。なぜなら借金をしていて確かにそう思うのだが、同時にそこまで思っていなかったからだ。自分が最悪で申し訳ないことをしているという気持ちを認めたら、自分が自分でなくなるように感じる。拓海はただ僕を見ながらニヤニヤしている。

「認めたら変わるのか？」

「さあ、それを実感するのはお兄ちゃんの心だよ」

「そうか……だよな」

「ぼくに聞いて変わらないなら、お兄ちゃんの心はすっきりと晴れない。すっきり晴れたときは目線が変わるから」

と、拓海は尻をふりふりと動かした。

僕はこの弱さを拓海に見せるということは、多くの人にも公開するということだ。そしたら恥だといわれるし、自分のプライドも傷つく。というか、本当に恥なのか？ プライドって何だ？

「**お兄ちゃんのことを恥と見る人は、お兄ちゃんを恥と**
思っているのではなく、自分自身を恥だと思っている人
なんだよ。だから回りの意見なんて気にする必要ないよ。

むしろそういう弱さを持った人間がお兄ちゃんを助けてくれることだってあるんだから」

拓海はそっと和え物を添えるように言った。そして僕は決意した。

「受け入れる、拓海、俺、何が恥ずかしいのか、そしてプライドが傷つくのか。それらってゴミだったんだな」

「うん、お兄ちゃん、それがわかったら明るくなれるよ」

「ああ、心がふっと軽くなった気分だ」

「お兄ちゃんにとって恐怖や絶望感といったもの、それに希望や望むものは全て、**それ自体がほしいのでなく、心がどういう状態になっているのかを知るために見ておくんだ。そして見たらまずは認めること、受け入れること。**でもそれだけじゃ終わらないよね。だってここでしゃべるのはそこに豊かさを上乘せするんだから」

「うん、借金の実情を認めたはいいけれど、どうやって返済していくかだよね」

「いや、それも気にする必要ないよ。お兄ちゃんはそういうことを気にしなくても常に富は流れているんだ。で、どこから受け取ろうとかまわない。**お兄ちゃんが富を止めていた根本的な原因は一つ。売り上げでしか富を得る手段がないと決め込んでいることだよ**」

この言葉にショックを覚えた。思っていることをズバツと

いわれたからに他ならない。

「お兄ちゃん、富はいたる手段でやってくる。例えゼロ円でもお兄ちゃんのところにドアチャイムがなってアンケートにお答えしたらお礼金として1000円差し上げます～といったことがよくある。こういうのも『富』のなせるわざで、そういう事実を認めることが出来るかどうか？ これも富であり、臨時収入だけれど、わかる？」

「うん、わかる。自分の売り上げしか考えていなかったから。でも富ってそう考えたらお金を拾うことも含めていたるところに落ちているんだな」

「というか最初からあるんだよ。後はお兄ちゃんが自分の中にある富『好きなこと』を形にしてどんどんと全国に向けて発信していだけだよ。自分の作った作品を全てに向けて発送しているという気分でやるんだよ。それが社会貢献なんだからさ」

「そうだね、僕のメールマガジンの読者だけとかって限定しなくてもいいんだよね」

僕が言うと、拓海はにっこりした。

「そうだよ、限定するから枯渴意識が生まれる。というか枯渴意識の根本は限定だからね。でも枯渴意識を限りなく捨てれば捨てるほど、無限に生み出される富の意識が出てくるようになる。人間ここを理解するためにいろんな形を持って生きることになっているんだ」

「ほお、というと僕以外にも不幸なことを味わっている人は」

「うん、彼らには彼らなりの幸せな道があってそれに気づいてもらいたいために、そういう現象が起きている。ただそれだけだよ。そこに気がついたら、無理して人を幸せにするなんて思わなくてもいいんだよ。ただ、自分の好きなことを通して『幸せにいたる道』に気づいてもらえればいいなって」

「へえ、それが社会貢献なのか？」

「社会貢献は押し付けがましいものじゃないからね。自分の好きなことをする、そしてそれを人に伝える。そして好きなことで相手が『心がほっとした』といったらすでにそれが社会貢献。無理して変える必要なんてどこにもないし、無理するとそれが自分に跳ね返ってくるから注意したほうがいいよ」

「ああ、でもさ、世の中の人って結構無理している人多いよね」

「そうだね。でもそれはお兄ちゃんの頭の中だけの出来事で、実際は無理していない人だっただくさんいるよ。人間って無理して変わる人はいないんだよ」

「ははは、自分は結構無理していると思っているけれどな」

「いや、無理はしていないよ。お兄ちゃんにとってその時間がとても最適だから、そういう部分を出しただけに過ぎないんだ。それに願いが叶うのに時間はかかるって言うけれど、願いなんて思わなくても自然と向かいたいらすでに手足が勝手に動いているよ。お兄ちゃんは仕事上、これからどんどんと手足が勝手に進む方向に動くよ」

思うけれどね」

「そうかい？」

「まあ、家にこもっていると精神的に辛くなるでしょ」

「確かに家にこもってばかりいたから……外の空気は思い切り吸いたくなるわ」

「うん、だからお兄ちゃんが豊かさにしたがって生きる**と決めた**とき、人生がばたばた変わっていくし、常に豊かさに囲まれているから、不安定なことや不安が出来たときは全て対処できるようになるよ」

「そうか、でも不安って本当に不安だからなあ。何しろ拓海のおかげで若干不安は消えているけれど、俺、明日からどういう生活をするかなんてわからないし」

「そうだ、好きなことをするとお兄ちゃんにとって余計な無駄周りはしなくなるよ。というか無駄なことも全てお兄ちゃんにとって必要な素材になってくる。ぼくの中の何かがお兄ちゃんに伝えたいことがあるんだ」

※ 意識をはっきりするために、今起きている現象は全て、心がどういう気分なのかをはっきりしよう。

そしてはっきりしたらそれを受け入れよう

受け入れた先は「流れに身をゆだねる」ことをしよう。

■ ミッションと自己を高める

ぱっと目が覚めた。拓海の話を知りたかったが、時刻は午前8時を回っていた。僕はいつものようにパソコンと向き合いながら、無収入の仕事をしていた。本日も無収入。

さて、これからホームレスになって自分のしたくない仕事ばかり手を伸ばすのか。僕はわがままなのかもしれない。でも、拓海と話をしていて無収入ながらも作品を書いていた。その作品しかすることがないから一気に70ページまで書くことが出来た。そのくらいやることがないのだ。そしてこれを後は広める。広めるのは明日にしよう。なぜならまだ読み直していないから。

僕は風呂に入り、そして気分が少しだけ軽くなったのを感じた。辛いことばかりだったのに、気分が軽くなっていることに感謝してしまう。

本当に生きるってこういう掘り起こしても、起こしてもでこない井戸水の気分を味わって初めてすばらしいなど感じるようになる。

ということで夜中になったのでまた寝ることにした。

すると今度は拓海と空の上にいる。

「鳥の目で見ると、地球って面白いね」

「ああ、そうだな」

と、僕は言う。

「こういう視線で見ると、どこからどういったら最短距離でゴールにたどり着いてしかも安全なのかわかるね」

「うん、そうだね」

僕は空からしたを眺めた。

「今日は何を？」

「お兄ちゃん、疲れない生き方って知っている？」

「疲れない生き方？」

僕が尋ねると、拓海はうんとうなずいた。

「うん、人間には得手不得手というのがあってさ。得意で好きなことに没頭しているときは人間、幸せなんだよ、たとえどんな状態でもさ」

「ああ」

「でもね、同時に得意じゃないかつ嫌い、あまり情熱を打ちこめれない分野で仕事をする事ほど、辛いものはないんだよ。というか、人間はそちらを選んでいることが多いけれど」

「そうだよなあ。僕がそうだったように」

「でもね、もっと面白いのはここからでさ、人間って好きなことを仕事にすることを認めたくない生き物なんだよ」

「それは過去の記憶が邪魔しているって話だよな」

「そう、それで生きる方法があるという情報がないために、限界を創ってしまう。枯渇意識を捨てたらそれだけで生活できるもんだよ。だって自分の知らないことは全て回りが知ってくれるんだから、回りに聞けばいいんだから」

「そうだよな～～回りを使えばいいんだもんな」

「その代わりにお兄ちゃんも回りに貢献しないといけなくなるけれど、その貢献をお互いすることで、初めてお兄ちゃんにとって楽しい現象が訪れるようになるよ」

拓海はふっと雲を一つちぎってあむっと食べた。

「雲、食べれるのか」

「美味しいよ」

「じゃあ」

とって僕もあむっと食べる。確かにクリームパンの味がした。

「お兄ちゃんが好きなことはもうやっているよね？」

「うん、ちょっとビジネスを外において、やることにした」

「うん、それでいいんだよ。といっても今のお兄ちゃんには不安なことばかりだろうけれど」

「もちろん不安だよ。でもやっているると精神的に楽になる」

「うん、それをやってほくに見せてね」

「ああ、そのつもりだ」

「じゃあ、その好きなことを本当に仕事にするには社旗貢献、ミッションが必要になる」

「社会貢献、多くの人にはしているけれどどうして儲からないんだろうな」

僕がぼそっというと、拓海はいった。

「それはその人のしていることが社会貢献じゃないからだよ。社会貢献しているなら生活について困ったことは何一つないんだ。何しろ毎日社会貢献につながることをしていればいいんだから。で、困っているとしたら社会貢献そのものをしていないか、もう一つは」

「自分の記憶で限界を創っている、だったよな」

「そのとおり」

と、巧みはあむあむと雲を食べている。

「で、社会貢献に持っていく方法を一つお伝えすると、実際に自分の好きなことを人に見てもらおう」

「ただ、それだけでいいのか？」

「うん、何しろ社会貢献の動機は人それぞれだけれど、根底にあるのは愛だからさ。人間って二種類の動機で動くように出来ているんだ。愛か恐怖か。で、恐怖はすでにお話したね」

「ああ、聞いた」

「で、愛はいかにして喜んでいただけるかだ。自分も喜ぶし、回りも喜ぶ。まずは自分が喜ばないものを創ったらアウト。だって自分が喜ばないもので人を喜ばせようとしても、喜んでいないから、どんなにいいものでもいらないってことになるからね」

「そうだなあ」

僕はこれについて言うと思いがたることがある。その思い当たることの一つとして、自分は教材、サービスを出した、しかも低額で。でも誰も手にしなかった。自分にとっては理念そのものなのに。

「まあ、それは誰に伝えたいのかが曖昧だからだよ。それはおいといて、人を愛する前にまず愛さなければならぬ人間がいる。それは自分自身だ」

「自分ほどよく愛せないって人はいますからね」

「うん、自分を愛することほど難しいものはない。周り

を愛するのは簡単さ。でも、自分ほど愛することは難しい。なぜなら自分ほど自分のしたことを認めれない自分がいるからだ」

「そうだなあ、僕も時々しくじったときは感情が爆発するよ」

「そのとき、お兄ちゃんは何を感じた？」

拓海はいつものように質問してきた。僕はいつものように習慣として考える。

「そうだなあ、感じたことはどうしてこんな無駄なものにお金をつかうんだ、よく説明を読まないんだっていう、自分へ向けての失望かな？」

「うん、その感情を徹底的に味わってみて。そして味わった後、そこからどういう感情になったのかを整理してみて。自分はそこから何を学んだのかを整理してみて」

僕はあの時のことを思い出した。それは自分の簡単な不注意のおかげで人に多大な仕事の迷惑をかけたこと。それをしたとき、僕は申し訳ない気持ちでいっぱいと同時に「どうしてそんな失敗をするのか」と、自分に対して怒りを感じていた。

「あの時は……本当に自分に対しての失望だったけれ

ど、今思えばなんでもなかったんだよなあ。何か怒っていた対象もわからないけれど、申し訳ない気持ちになってきたよ」

「そしたらそのときの自分を受け入れることは出来る？
失敗したらムカッと来る自分を」

「うん、それどころか申し訳ないと思っている」

「じゃあ、ごめんなさいって認めたらいいよ」

「うん、ごめんなさい」

こういうと、心の中ですっとした。

また、一つ余計な思い込みが消えたのだろう。

「さて、ミッションを行うにあたって邪魔なのがそういう余計な感情、自分を卑下する感情が邪魔になってくる。でもこの感情を持つことにより、それを手放せば、新しい視点で見ることが出来るようになる。お兄ちゃんが持つておくべきことは一つ。どんな状態でも人を幸せにするということだよ」

「とっってもくさいけれどな」

「うん、でもそういうくさいところがない人間は本当に魅力がない。魅力ある人間はくさいとわかっているでもそのために行動している人間なんだ。そういうくさいところを批判している人は実際何をやっているかといったらあまり魅力的でないことをやっている。人間それぞれの生き方があるから、別に僕はどうでもいいけれど。でもね、批判する人はお兄ちゃんに教えてくれる人間だからありがた

く思わないといけないよ」

「批判とくると大概嫌なことばかりだけれど……どういうことだい？」

僕が聞くと、拓海はごろんと転がった。

「批判する人はお兄ちゃんの心に批判する要素があるってこと、要はお兄ちゃんの自信ないところを言われているだけだよ。自信のないところを言われているだけだから、その部分を見つけて、そのときの感情を深く味わって認めてあげる。そして認めた後、全ては無敵だから、それに当たって取り組む自信を持てばいい」

「ちょっと難しいな」

「簡単だよ、さっきお兄ちゃんが味わった感情。あれを深く味わって認めたら、今度はおおらかな心で受け入れていけばいいんだよ。たったそれだけだから」

「うん……」

ちょっとだけ僕は自信がなかった。受け入れるというのは簡単なようで結構難しいのである。

「お兄ちゃん、難しいと思っている心があるから難しいだけだよ、簡単だよ、商売も人間関係も人生も。全てを受け入れて、どんな状態でも無敵だということを前提に

生きる。そして好きなこと、情熱を出せるものに集中して取り組む。それを人に伝える。それを見た人が喜ぶ。そして後はそういう生活を毎日こなしつつ、楽しいことや新しいことをどんどん取り入れていく。それだけだよ」

「そうだよな……」

「これが喜びのサイクルだよ。楽しいことは人に伝わる。そして伝えたくなる。気がつけば大きくなっている。すごく単純」

僕も拓海と話をすることで、どんどんとそういう意識へ持っていくことが出来るようになった。どういうことかわからないけれど。

「ミッションを持つようになると、どういうわけか、商売においても何をしたらいいのかが自然とわかるようになってくるし、人間にもこういう人にはこう付き合うというのが計算しなくても出来てくるようになる。不思議に思うかもしれないけれど、自分の色眼鏡で物事を見なくなり、自然とあるがままに全てを見直すことが出来るようになる。これはうそじゃないよ」

「拓海の話にうそはないだろ？」

「お兄ちゃん、ありがとう」

拓海はえへへと微笑んだ。正直拓海にならだまされても

痛いとも思わない。

「ミッション、夢を行ううえでこれからの人生欠かせなくなるのは自分をいかにして高めるのかということだよ。自分を昨日よりも高く、おおらかに、広くしていく。でも体は無理だから、心を広くおおらかに高くしていくってことだからね」

「あ、ああ」

「自分を高めていけば自然と自分の値打ちがわかる。そしてその値打ち以上を目指していくんだ。それが好きなことにある。好きなことを人に伝えるというのは自分の値打ち以上の効果がある。お兄ちゃんの好きなことは伝えることだよな?」

「う、うん」

「だったら伝える視点を通して、どんどんと自分の視野だったり、体験だったりとつかんでいかなければならぬよ。そして同時に書くことも相手が喜びをあげるように、簡単に言うと、相手を読むと『うほー』と跳ね上がることを意識する。そのためには自分で書いた文章を声に出して読む。そして自分の文章がどういう結果をもたらすのかを意識する。とっても相手が『何、何』というもので引っ張ってくる」

「なるほど」

「とにかくお兄ちゃんはどこまで伝えることに関して情熱的になることが求められている。いや、お兄ちゃんだけじゃないね。ぼくもだし、周りもそうだね」

「自分を高めることか……どうしたらいいんだろう?」

「高める方法は3つあるよ、一つ目は自分より上だなという人の脳みそを借りること。そしてもう一つは自分をとことん深く掘り下げること。そして最後はとことん好きなことをやること、すなわちこれが一番大切だね。アウトプット」

「ああ、いつもやっていることか」

僕はなぜか胸がほっとしている。

「うん、お兄ちゃんがいつも好きなことを原稿用紙に向かってやっていることをすればいいんだよ。すごく簡単なことでしょ」

「うん、でもアウトプットが一番大切なんだな」

拓海は雲のようなパンをまたほおぼる。僕もそれに見習った。

「アウトプットするというのには二つの意味があるんだ。一つは今日、只今の実力を知ること。そしてもう一つは自分の情報を整理して、ほかの仕事を見直すときにとても役立つということ。実はこの二つを知るにはアウトプットをひたすらするしかないんだ。多く人はインプットばかりしてアウトプットをまったくしない。それでいて夢を達成するにはどうしたらいいかと聞いてくる。夢を達成するならアウトプットした時点ですでに叶っていることに気づ

かないと、どんどんとアウトプットが出来なくなる」

「それはどういうことだ？」

僕が聞くと、拓海は天を指した。

「夢って何だと思う？」

「え、豪邸に住むこと？」

「それは願望だよ、夢って今を楽しく感謝して生きることだよ。それがもう夢の本質で、みんな夢だって意識しなくてもすでに達成しているんだよ」

「でも、実際に達成していない人もいるじゃない。それに日々の生活が大変でさ」

「うん、それはね……そこが夢だって思っているから。夢に時間（年）も空間（場所）も関係ない。それに富と同じで、そこという形で固定してしまうと、一気に可能性すら逃げていく、どんな手段でも叶うものは叶うからね」

「すげえなあ、拓海」

「いやいや、ぼくはただ言わせられているだけだから」

「へえ」

僕はノートに書きたくなった。ミッション、社会貢献というのは難しく考える必要はないこと。そして夢には時間も空間も関係ないこと、すなわち何歳にこれをするかということでもなく、この場所でこれをするかということでもなく、

頭の中ですでに夢は出来上がっているって事なのか。

「お兄ちゃん」

「何？」

「夢が叶う方法は夢を今すぐ想像することだよ」

「ああ、そうだよな」

「でね、そのとき大切なのが、想像した夢が本当に楽しいかどうか？ その感情をきちんと確かめることが必要なんだよ」

「ど、どういうことだ？」

僕はぐるりと寝転ぶ。夢の中なのに……。

「豪邸に住みたいといったら目を閉じたらもう住んでいるんだよ。ただ、大切なのはそのときどういう感情が出てきて、そういう生活を毎日送るとどういふ気分になるのか？ そこを捉えておかないと意味がないよ」

「なるほどなあ」

「お兄ちゃんが好きなこととして生活しているのが楽しいのも、すでにそうなっている自分がどういふ未来を送っているか、想像の中ではもう受け取っているからだよね」

「確かに、目を閉じて南の島だろうがアラスカだろうが、豪勢な食事だろうが、目を閉じたら味わえるよな」

「でもそれが毎日続くんだよ。どういふ状態になると思

う? **一瞬じゃなく、毎日だよ**

「うーん、そう考えたら……」

僕は豪邸生活を毎日想像した、豪勢食事を想像した。
毎日続くと……

「飽きるわ」

「うん、だったらその道はきっぱりとやめたほうがいいよ。目を閉じて毎日そういう生活をして長続きするものを選んでいくといいよ」

「長続きするものね」

「うん、長続きしないものは飽きてしまう。本当の夢は目を閉じたら全て叶っているからさ。**残されたものは毎日やっても飽きることのない、真剣に取り組めるものを次々とやっていけばいいんだよ**」

「そうだなあ……そっちのほうが長い目で見たら大切だよね」

「うん、そっちのほうがはるかに大切。だって明日死ぬかもしれないのに、いや、いつ死ぬかもわからないけれど、死ぬときから自分を逆算していけば、何を毎日続けたら『最高の状態でぼくは死ねるんだ』って変な話だけれど、誇りを持てるようになるよね」

「ははは、本当に変な話だな」

「うん、でも明日死ぬとして24時間残されていたら何をするか? この部分は考えているか考えていないかで大

きく結果をもたらすことになるよ」

「そうだなあ……そういえばクライアントでも『そんなこと考えていませんし、考えられません』っていついたもんな」

「難しく考えないで、明日死ぬとわかったら今、何をするのが一番楽しく、最高の状態で死ぬかということだよな」

「社会貢献ってそういうためにあるのか？」

「まあ、人には人それぞれの楽しみがある。で、それが社会貢献だっていうお話だよ。でも社会に還元するのが生きていて最も楽しいと実感できるよ」

「へえ……まあ、見ず知らずの人から感謝されたら喜ぶもんな」

「そういうものだよ、楽しい世の中って」

社会貢献するときの条件

- 1 否定的な思い込みを手放す
 - 2 目を閉じて実際にそうなっている自分を味わう
- 楽しい、毎日それが楽しい、自然と手を出すならそれを行う、楽しくないと感じたらやめる。

■ 身をゆだねること

「どうやらお兄ちゃんにお伝えするのも最後になってきたね」

と、拓海はふっと立ち上がった。

「どこに行くんだ？」

「帰るんだよ、お兄ちゃんにお伝えすることを伝えたからさ。お兄ちゃん、ぼくが言ったこと覚えている？」

「あれか？ 頭の中に全て答えがあるんだよって」

「うん、ありがとう、よく覚えてくれていたね。頭の中に全ての答えがある、これ、どういう意味かわかった？」

「あ、ああ、こういうことだよな。何が起きても全てを受け入れて生きろってことだよな」

「うん、そうだよ。お兄ちゃんからするとそれはとても受け入れがたいこともあるかもしれない。でも受け入れるようになると、全てにありがとうございますと自然と出てくる、ありがとうなんて本当に『身をゆだねる』ことが出来る人には自然と出てくる言葉だからね」

「そうか……お前と出会えて本当にありがとう。俺、立ち直れるよ」

「お兄ちゃんの好きなことを徹底して追い詰めて突き詰めていくんだよ。そしたら道は必ず見えるから」

「うん、うん、ありがとう……」

僕は涙が止まらなかった。

「身をゆだねないとゆだねるを得ない出来事がやってくる。身をゆだねると一気にエスカレーターに乗るような気持ちになって、気がつけばトンドン拍子で事がうまく運んでいる。富や報酬、食べ物は周りがそれを見ているんな形でもたらずから気にしないこと。それ以上に大切なのはお兄ちゃんの好きなことは社会貢献できるって事を理解することだからね」

「うん、本当に、ありがとう。やはりお前は最高の先生だ」

「ぼくだってお兄ちゃんと話が出来て僕もうれしくてさ、本当にありがとう」

「こちらこそありがとうございます」

僕は深く頭を下げた

そして目が覚めたら天気は晴れだった。

夢はどういう風になるのかわからない。ただ、僕は社会貢献を投げ出すことなく突き詰めていこう。それが僕にとっての楽しみでもあるのだから

おわり

メンターは小学校1年生 続 + 5つのステップ 64 P

解説～～

■ おまけ

さて、これは僕の不思議な話（実体験）をしたいと思う。
僕以外にももう一つ身近な話をさせていただこう。

大切なのはあなたは「社会に何が出来るか？」を常に
問いかけ、そして出来ることを101%の気合で仕事をする
ことにある。それをしていくと熱が出るし、何よりも感謝
の言葉をいただける。そしてどういうわけか臨時収入だっ
たりと、ありえないことが立て続けにおきる。

僕はそれを単純にまとめてみた。

そしてこれは人間関係にも商売にも成り立つことがわかつた。その公式はとっても簡単。

- 1 嫌いなことと好きなことを知る
- 2 思い込みを全てにおいて捨て去る
- 3 常に、自然と感謝する
- 4 流れに身をゆだねて生きる
- 5 好きなことを仕事にして、社会貢献する

まあ、これだけなのだが、結構難しい。

というのも「**今までの自分、過去の自分**」が否応なしに邪魔してくるからだ。

たとえば好きなことをして生活しなさい、今までなんとなくやっていた仕事をやめなさいといった場合、あなたはこういだろう。

「生活どうするの？」

そう、こういう「**過去の情報**」があなたの足を引っ張るようになる。もちろん人間にはベストなタイミングがあるから、やめると決めたときはやめる条件がそろっているし、やめればいいのだが、なかなか過去の記憶が足を引っ張ってそうさせてくれないものだ。ちなみにやめるやめないはあなたの意思に任せる。その**選択肢**は僕ではなくあなたにあることを忘れずに。

で、あなたが新しい一歩を踏み出すにはこの

「**過去の自分との決別**」が必要になり、それだけでなく「**最悪な環境**」も受け入れる心を持たないと、本気で変わることが出来ない。

僕の場合は新しい自分を踏み出す前はとても最悪だった。仕事はミスするし、お金は入らないし、食事はまともにできないし……と、いろんな意味で最悪だった。

で、どうしてこういう状態を味わっているのか？
と、問いかけてみるものの、答えは出てこない。

そしてとうとう「もうだめだ」と本当にだめな出来事が起きた当日、奇跡が起きた。その奇跡によって僕は確信を持ったのだ

「世の中は思い通りにならない。いいことも悪いことも」

これに気がついてからというもの、僕は生活のために仕事をするをやめた。もっと言うと**仕事の定義を変えるようにしたのだ。**

今まで振り返ってみたら仕事は「生活に必要」だからやっていた。しかし、それじゃあいけない。

本来の仕事は「自分の中にある無限の富（愛）を出し

惜しみなく提供することで、人様に喜んでいただき、人生を変えるお手伝いをする」ことだと悟った。

要は**社会貢献**。

で、社会貢献が最も発揮できる分野は「伝えること」だと一瞬で悟った。というかここは大学時代にすでに自分でノートを整理していたら見つけたことだ。

好きなことを見つける方法はとっても簡単だけれど、しんどい。というのも好きなことを見つける前に嫌いなことを見つけないといけないから。

で、**自分の嫌いなものをピックアップしていく**。

それはエゴでいいから、こういう仕事はやりたくない、こういうことはしたくない……ということを片っ端から書いていくのだ。

そしてこれを書き終えたら次は好きなことを片っ端から書いていく。書いていったらちょっと休憩して、その後嫌いなことと好きなことをまとめていく。

まとめることによって、大体好きなこと＝本来やりたいことが決まってくる。で、過去に大好きだったことを次は書いていただき、そして人からほめられたことも書いていた

だきたい。

答えは「自分の好きなこと」に全て隠されている。
そして好きなことは「形」が違うだけであって「本質」
は何も変わらないのだ。

たとえば、僕は過去、好きだったのは
「ウルトラマンごっこ」だった。

そして時間を経てアルバイトしているときに好きなことは
「商品売る」ゲームだった。

そして自分を整理していて常に自分の頭には
「妄想」があった。

こうやって
ウルトラマンごっこ 商品売ること 妄想

この3つに共通しているものは何だろう？
好きなことをまとめて声に出しているうちにはっきりした。
それははっと気がつくものだ。

「そうか……好きなことは伝えることなんだ」

どうして共通項があるのか？ 普通に考えたら出てこないけれど、強引にまとめあげるとこのようになる。

その1 ウルトラマンごっこは「自分で妄想した世界をつくり、その世界でプロデューサーとなって演出し、そしてタレントとしてウルトラマン（怪獣）になり、シーンを撮影する」

その2 商品売るゲームは「自分で商品の魅力を考えて、実際に使い、そして紹介する」

その3 妄想は「自分の世界を作る」

これらをまとめあげてことを「**抽象化**」という。

この思考が出来るようになればなるほど、自分で全て何とかするという発想が消えていき、お任せの人生を送ることになる。だから全て自分で何とかしなければという人生を送っている人ほど、抽象化思考は身に付けていないことになる。

詳しいことは苦米地さんという方の書いた本にそのやり方が載っているので、そちらをごらんいただきたい。

ちなみに僕なりの抽象化思考訓練として、やはり小説を書くことである。**仕事こそが抽象化思考訓練そのものである。アウトプットすること。**

後、周りの男や女を観察すること。きれいな人の特徴とそうでない人の特徴をまとめ上げること、データにとること。そうしていくことで共通点を見つけていくこと。

こうやって抽象化していく。

あなたもモテる男、女になりたいならまずは「あなたの中にある」きれいな人を思い浮かべて、その人の特徴を一つずつ出して行くことをお勧めする。

で、同時に街に出て、いろんな人間を見てきれいな人とそうでない人、主観でいいから見てまとめてもらおうと、必ずきれいになるために必要なものがわかってくる。

さて、僕はこのようにしてまとめた後、早速小説を書いた。といっても小説を書いたときは恥ずかしすぎてなかなか世にだすことをしなかったが、ある日、決意して出

すことにした。

そしたら二次予選までいったけれど、最終選考には落ちた。まあ、その後、自費出版サービスのところに冗談半分で申し込んだら、ちょっと加筆すればすぐに出せるとのことで、驚いたが……。

で、まずは嫌いなことと好きなことを見つける。
でもそれをする前にどうしても邪魔が入るといけないので、まずは大掃除をしておこう。

掃除じゃない、家全体をひっくるめた大掃除だ。
大掃除をすることで、必ずといっていいほど、部屋に驚くことになる。

「ああ、俺の部屋はこんなに広いのか」

これに気づくことが出来たら、あなたの環境は掃除と同じで簡単に変わってしまう。

たとえば「俺には出来ない」といって拒否していたものが、いざやってみたら「意外と楽しい」となり、ついには天職になってしまったケース。

これと大掃除をすることで環境が変わってしまうことは大差がない。本当に大差ないどころか、同じなのだ。

で、大掃除をして嫌いなことをピックアップして行き
そして最後に好きなことを行う。

こうすることによって、周りの環境はいとも簡単に変わっ
てしまうことをまず、体で実感してもらいたい。

体はエッチでも言うが、正直だ。あなたの頭で考えて
いることよりも正直だ。あなたは頭で考えていることが世
界だと思っているけれど（実際そういう風に考える人がと
ても多い）、実はあなたの頭以上に体の声、直感のほう
が何十倍、何百倍も知っているのである。

でも、なかなか人間は「頭」で出来た常識にとらわれ
て何事も前に進めない生き物。だから頭でとらわれた常
識に縛られるならそれでいい。僕はそこに関して言うと**選
択の自由**があるので、そういう人生を送るのもありだ。

まあ、批判はかまわないけれど、すると言うことは同時
に自分の「現状」を知る機会なので、**批判すると同時に
そのときの自分の感情、自分の現状はこうなんだと認識
しよう**。その認識が出来ないと、周りを愛することも出来
ないし、何よりも「明日の生活どうしようか」でいつまで

も迷ってしまうのだ。

あなたがどういう道を選ぶのかは僕には関係ないけれど、ただ、僕の伝える道は全身全霊をこめて仕事に、生活に打ち込み、自分の頭で考えられないような出来事が次々とやってくるよ~という真実をお伝えしているだけである。それを信じるのもいいし、信じないのもいい。

さて、好きなことと嫌いなことを決めたら**すぐに好きなことを実行しよう**。僕はすぐに小説を書いた。あなたは何をする？ はっきり言うがスケールなんて関係ない。なぜならあなたのすぐにしたいことはすでにあなたの頭に詰まっているから。その中でちょっとずつできることをしていけばいいのだ。

たとえば音楽なら楽器を演奏するとか。ゲームなら早速ゲームをするとか。

一番いけないのはくすぶって何もしないこと。

あなたがするのは「好き」を仕事にして、生活の一部にして「社会貢献」することである。

好きなだけで仕事は出来ない。

そこに「周りに恩返しする、貢献する」といった社会に対する還元意識を持たないと、好きなことで仕事や生活は成り立たないのだ。

といっても難しく考える必要は何一つない。

なぜなら貢献するというのは周りの人、自分を含めて幸せになっていただくことだから。

自分がまず幸せにならないといけないのだ。自分の幸せをおろそかにして周りの幸せを考える人ほど、エゴに陥りやすいし、しかもそういう生活ほど自分の身を滅ぼすものはない。僕が神様ならこういう。

しかも幸せとは外側の状況でなく「幸せと感じている自分」を見つけること、すなわち内面だ。外面がどんな状態だろうが関係ない。

「まずは自分を喜ばせることを先に行って、それに飽きたら周りの人に喜んでいただける人間になりなさい」

何事も段階が必要であり、まずは自分自身が喜ばない

とダメなのだ。好きなことなら早速動く、それで動けないのは好きじゃないから。要は周りの評価で「好き」とインプットされていただけのことである。だから、その部分を修正するためにもう一度、好きなことをノートに書こう。

甘えたらいけない、これはあなたの人生なのだ。といっても、甘えるのも勝手だし甘えないで生きるのも勝手だ。**どっちを選んでも愚痴らないように。**

本来好きなことというのは「**自分だけを喜ばせる**」事が基準なのだ。だから、まずは自分の好きなことをして自分だけを徹底して喜ばせること。

正直お金はどんどん使ってもいい。
プラモデルづくりが好きなら作ればいい。
エロビデオ鑑賞が好きなら見ればいい。
食べるのが好きなら食べればいい。

とにかくまずはとりあえず一つ、今すぐ好きなことで自分の中の喜びを満腹にさせよう。

さて、おそらくこういう気持ちになるはずだ。

「一人じゃつまらないな」

このサインを感じたら、次からはいよいよ回りに貢献する視点に入る。つまらないというのは仕事でもなんでも

「人生を変える、視点を変える」大きなチャンスである。というか、大きなチャンスどころかサインなのだ。

だから「今の人生がつまらない」と思ったら旅行に出ても、内的旅行に出よう。すなわち、自分の楽しいところは『自分』しかわからないので、その自分に聞くのだ。

ノートを取り出して、何がつまらなくなり、何をしているときが楽しいのか？ 何を考えると楽しくなるのか？

はい、書きましょう。

この作業は1ヶ月かかるかもしれないけれど、そのくらい時間をかけても掘り起こすいい機会だ。というかそれくらいしないと、本当に求めている自分が出てこない。

人は必ず「飽きる」ときや「つまらない」というサインが出てくる。そのときこそ自分の心は次にどういうおもちゃを求めているのか、書き出そう。

そして書いたら生活状況がどうであれ、少しでいいからこなしていくことだ。これは僕の体験に基づくが、**見つけたものをやらない**というのはどういうわけかわからないけれど、それを**やらざるを得ない環境**にするように囚られている。

たとえば僕の場合、ネットビジネスが最もやりたくなくなったのは去年。しかし生活の手段としてそれはやらないといけなくなった。で、実際にやればやるほど仕事ミスが多くなり、精神的にも辛くなり、それに呼応するかのよう
に自転車、時計、その他色々なものが壊れていった。

で、あるとき腹をくくるような出来事がおきて、覚悟していたときに初めて「好きなこと」しかやらないと心に決めた。そしてその心に従って行動すると、どういうわけかあれほどとまっていた収入が流れてきて、どういうわけか仕事のミスはしなくなり、どういうわけか周りを愛せることが出来るようになった……。

何が起きたというのだろうか??

一つだけわかったことがあり、それは好きで社会貢献になると取り組んでいる伝える活動に精を出していたら自然とそういう状態になったということだ。

それを通してはじめてわかった。

「売り上げ」も「利益」も気にする必要はない。
もつという「生活」そのものも気にする必要はない。
ただ、「与えられた環境」で「最高の自分」を常にアウトプット、外に出していくこと。

そしたら後は「お任せ」の人生でいいんだということに気がついた。

ちなみに社会貢献のコツは「誰か身近な人に見てもらおう」事だけでいいのだ。そして感想をいただく。

ただし、**親には見せてはいけない**。親はドリームキラー、夢をぶち壊す人だから。あなたの親が「今のあなたの人生」を受け入れる人でない限り、本当に親に見せたらいけない。大体あなたの才能をつぶす人のほとんどは「両親」なのだ。

だからといって親を責めるのは意味不明なことというものの。親には親の視点があって、親の視点は一つ。

「子供に何も無い状態で暮らしてほしい」

で、実は僕も最近わかった最高の幸せは

「丸一日、何も無い、ただ感謝できる日々を過ごすこと」

だということがわかった。

で、本当に「ありがとうございます」を突き詰めていけばいくほど、そういう日々が「ありがとうございます」になっていく。

だから、親はある意味最高の幸せが何かをつかんでいるのだ。でも、あなたの好きなことを親には伝えないこと、彼らは「自分の過去の記憶」を武器に「固定した現実」をお伝えして、あなたの夢を全力でつぶしにかかる人たちだから。

僕はそういう理由があって、親には感謝しているけれど、夢につながるものは見せるつもりも伝えるつもりもまったくない。親は本当にどんな理由・状態であれ、つぶしにかかってくるから。

で、話を戻すと、あなたの好きなことを第三者に伝えて正直な意見をもらう。

意見をもらうときのポイントは

「読んで何かぐっと来るものはあったか？」

「率直に感じたこと」

この二つを聞けばいい。

この二つで率直に出たものが正直な意見になるのだから、それを聞けばいいのだ。

そしてその感想で得たものを基にして、今度は多くの人に伝えていく。多くの人に伝えるにはブログなり、ミクシーといったSNS。それと自分の友達に実際に見てもらおう。

要は大勢の人に見てもらえばいいのだ。これはインターネット限定配布なので、あなたはブログやミクシーといったものに属しているかもしれない。していなくてもかまわない。今から属すればいいから。

ちなみに友達を増やすコツとして、まずは誰かの最新日記を見る、そしてそれにコメントを書く。コメントと書くときは正直だけれど、ほめることを忘れない。

人間はけなされるよりもほめられるほうがいいのだ。

だから、ほめる。

どんなやつでもほめるところは一つあるからそこを見つける。ちなみに裏切られた人ですらほめれるようになったら、あなたは相当すごい人だ。なぜなら裏切られた人というのは「**あなたもそうなる可能性がとても高い**」ということを教えてくれたから。

で、あなたは裏切られたことに腹を立てていると、いつの間にかあなたも「人を平気で裏切る」事をする。実際、あなたが気づかなくてもたくさん裏切った人はいるのだ。裏切られた数の分だけ、裏切った数もいるということ。

だから、それに気づいて感謝したら裏切るような人間は現れてこない、裏切るという経験を通してあなたは冷静に自分を見つめることが出来たか？ それが世の中では問われているようだ。

このことについては後で詳しく説明するとしてあなたのしていることは社会貢献である。

で、あなたの好きなことを人に見てもらい、**相手が喜ん**

だらそれはすでに社会貢献である。社会といっても**全体に尽くしている気分で取り組むだけでいいのだ。**で、実際に人に見てもらったりやってもらったりして、相手の顔が喜びに変わったら最高だ!!

そしたらあなたは今すぐその分野でビジネスを組み立てていこう。もちろんそういう心配がある人は周りにビジネス思考をもっている人に相談するか、あるいは僕に相談するか……ただし相談料はお代をいただきますので、本当に相談したい人だけ、こちらを開いてくださいませ。

→ [こちらです \(6ヶ月の面談サービス\)](#)

■ 意識を明らかにして思い込みを消し去る

正直、これは僕と面談したほうが話は早い。特に第3者の意見がないとこの部分がわからなくなるからだ。

といっても、したくない人のためにここは書いておく。意識を明らかにするというのはとっても大切な作業。

まず、思い込みを捨てる前にこれからは全てのことで、**あなたが何かするたびにこう問いかけてほしい。**

「そうなることはあなたにとってどんな意味があるの？」

この質問は「本当に求めているのはモノ、サービスでなく、**モノやサービスを通して得ることの出来る精神的な何かであり、その精神的な何か**」を見つけるためのものなのだ。

精神的な何かを見つけないと（すなわち、本質）、あなたはいつまでたってもモノに振り回されてしまう。

たとえば「高級バックがほしい」「南の島で暮らしたい」ということや「お金持ちになって好きなところで食べたい」「旅行したい」といった願望を持っている人は多いけれど、**本当に大切なのはその下側**にある。すなわち

そうなることにどんな意味があるの？

言い換えると

そうなることによって、精神的にどんな気持ちになります？

そういう状態になって、本当にあなたが得たいものは何ですか？

こういう質問をすると、たいていクライアントでも

「そんなことはどうでもいいでしょう」と返ってくるけれど、それじゃあダメなのだ。**本当の願望はモノじゃなく、モノの下にある自分の心。**

たとえば高級バックがほしいのはバックがほしいのでなく、心を突き詰めていけば、「見栄」だったり「精神的満足」だったり「自慢」だったり、そういうことが見えないと、いつまでも「高級バック」に目が行ってしまい、ついには無駄なものだけが残るようになる。場合によっては借金する人までいるそうだが。

心なんて関係ないでしょうと思うのはクライアントですら思っているのに、そうだとすると、本当の願望はモノではない、お金だってモノだ。本当は精神的な何かなのだ。

そこに気づかないと、いつまでたっても「お金」といったモノに縛られて生活を送ることになる。

正直、精神的な何かの正体（心が本当に求めているもの）が見つかり、お金もバックも南の島もたいした価値がなくなる。というかこだわりが消えていくのだ。例えば生活に必要なお金ですら……。

結局願望は「願望そのもの」をかなえたいのではなく、その奥にある「精神的な何か」を満たしたくてかなえたいと願っているに過ぎない。

精神世界の本を読んでいる人なら「引き寄せの法則」なるものがあるけれど、あれを使うときのコツは物を書いたり、お金やこういう生活を送りたいと書いたら、

次は必ず「そうなることによってどんな意味が自分にあるのか？」

と、問いかけること。そして問いかけてその中で心から喜んだものは引き寄せることをしなくても勝手に叶うよう

になるし、喜ばないものは自分の力で後々叶うことになる。そこに向かう覚悟さえあれば……の話だけれど。

まあ、叶わないことがあっても愚痴らないことだ。何しろ世の中は「思い通りにいいことも悪いこともならない」から、とても面白いのであって、思い通りならいい意味でも悪い意味でも今頃、人間は辛いなあ～しか出てこないものだ。

ちなみに面白い理由は「自分でも予想できなかったとんでもないドラマが用意されている」からだと思ってほしい。というか本当に自分でも予想つかないことが世の中たくさんありすぎて、そっちのドラマはとても優雅に出来ているのだ。

で、話を戻すがあなたが書いた願望、辛いことは全て外側の部分である。

必ず「そういう状態を味わっているのはどういう意味があるのか？」と、問いかけていただきたい。

ちなみに答えは探す必要などない。なぜなら問いかけたら後は勝手に答えがやってくるから。それに答えを自分で見つけることが実は自分の可能性や思い込みをますます広げてしまうことになる。

この部分であなたになっていただきたい最高の状態は

「どんなことがあっても考えないで、直感で進んで決めていただくこと」だ。

そして喜びを阻害する要因が「自分の思い込み、期待、不安、怒り、ねたみ」といった感情なのだ。

これら全てを取り除いて、おなかのそこあたりからぐっと力が入る状態。これがあなたに届く最高の悦びであり、この状態で生活を送ると立て続けにいいことがおこるようになる。

しかし、大概嫌なことばかり起きるのはやはり頭の中に不純物（成功や期待、不安や恐怖といった未来への思い）がたくさんあるために、本来の力を発揮できないだけなのである。

そこで、これらを取り除く作業を一つずつこなしていく。僕がいないということを前提で行うので、あなたに用意していただくものはノート。

もし身近に「メンター」と呼べる人がいたら、その人に願望を伝えるといい。そしたらメンターは必ずといっていいほど「それがあなたにとってどういう意味になるのか？」

ということを間違いなく問いかけてくるから、それについて答えていけばいいのだ。

さて、いない場合はノートを取り出してあなたの好きなこと、願望を書いた後に

「それをかなえることにどんな意味があるのか？」

と、問いかけていこう、ここで出てくる答えはあなたの中のイメージばかりだけれど、それでもいいからとことん書いてみよう。とことん書くのだ。2, 3個書くだけじゃダメだ。書くなら100個200個書く。

基準はひとつ。「心がはっとした状態」。

雨が急に快晴になった状態。

そういう心の状態になって初めて「本来得たかったこと」が見えてくるようになる。

そしたら今度は仮に叶ったとしてそのときの気分を味わってみよう、南の島に住みたいなら、南の島に住んでいる自分を先取りして想像しよう。

できない？

なぜ出来ないのか？ あなたが書いた願望なのにどうして出来ないのか？ 実感がない？ じゃあ実感のないものをどうして書くのか？

で、ここの答えは一つだけ、あなたは周りの情報によって、自分もこうなりたいな～といった浅いところでしか物事を考えていないからだ。要は旅行会社のマーケティングに乗せられているということ、それだけでなく自己啓発所のマーケティングに載せられていること。

たったこれだけである。で、相手を責めると何も学んでいないことになるから、そういう時は必ずこういう。

「ああ、気づかせていただいた、ありがとうございます」

有難うございますってのは一番災難があっても本当にひどい災難を避ける言葉だし、前向きになってしまう言葉だし、**どんなことにも身をゆだねて生きれる最高の言葉である。**というか、絶望のそれも立ち直れないところに

足を引っ張られたものにしかその有難うございますがもたらす「言葉の意味」はわからないと思う。

感謝しろといったってこんな現状できないよ〜と述べているうちは正直、感謝したくなるような出来事がやってくるので安心していただきたい。

ちなみにそれは天からお金が降ってくるのではなく、むしろ槍が降ってくるほうだ。要はもっと災難が起きること、で災難の災難、それも立ち上がれないところまで来て、その状態において唯一助かった時（別名：九死に一生状態）に、本当に何事も心から感謝できるようになる。この九死に一生状態が起きるまでは、感謝の意味なんて絶対にわからないだろう。

これは僕だけなのかもしれないけれど、人間は感謝できるようになると、本当にいい事が起こる。そしていい事と同時に九死に一生状態もおこる。その九死に一生状態は何も環境でなく精神的なことでもいいのだ。で、問題はそういう状態になって本当に感謝できるかどうか？

これができるようになったら流れに全て身をゆだねる生活になるので、後は好きなことをして社会貢献することに集中するといい。

これが出来ない状態だとまだまだ8回死んだ状態になる。まだ生きることが出来る可能性はあるのだ。だからますます死にたくなる状態が起きる。

で、このようにわかるようになるのは「自分の意識」に対して思い込みを捨てることが出来るようになってからだ。

あなたの思い込みは想像以上に手ごわく、ちょっと気を抜いていればすぐに列を成して襲い掛かってくる。あなたはその列を成して襲ってくる思い込みを一つずつ明らかにしていって手放していかないとイケない。

ちなみに**手放す方法**はとても簡単。

否定的な言葉や否定的な状態をノートにかいたら×印を書いて、「**今まで教えていただいて有難うございます**」ということ。

手放すということは否定的な状態から何かを教わったということになる。だから教えていただいて有難うございませとお礼するのだ。

この意味がわからない人は多いと思う。要は先生にこういう質問をしたとする。

「先生、数学の微分がわからないのですが」
それに対して先生が答えた。

そしたらあなたはどのような言葉を出すか？
まさか「何でこんな状態になるんだよ」

なんてことは言わないよね？

「先生、忙しいところ教えていただき有難うございます」

だよね？

それと同じであなたには強力な先生がついている。それはあなたにはわからないし目に見えない「人生」という名の先生だ。あなたは人間でなく、僕でもなく、人生という先生に常に問いかけて、教えていただいているだけに過ぎないのだ。

先生はわかりやすい形であなたに教えてくれる。それがたとえ不幸なことでも教えてくれる。ただ問題はあなたがそれに気がつくかどうか？

で、先生が教えるということはあなたはどこかで質問をしているのだ。で、どういう質問をしているのか？ それ

はあなたの普段の口癖や考えていること、思っていることである。

あなたが普段から思っていること、それが人生という先生に問いかけていることだ。たとえば「こういう人生送りたいなあ」「あの子を口説きたいなあ」といった願望、あるいは「ネットビジネスで1億稼ぎたい」「●●で大もうけしたい」といったこと。

こういったものは全て先生に向かって
「先生、ネットビジネスで1億稼ぎたいのですが」

と、問いかけをしている。

だから先生はそれに答える形で「答え」にわかっている。ただくためにネットビジネスで稼ぐのに必要な情報、環境全てにおいて提供してくれているのだ。

そこに気づかないとあなたはいつまでたってもクレームを言うことになり、先生は傷ついてしまう。先生を敵に回すと、あなたの人生に何を問いかけても返って来ない。というか先生は直接あなたにお伝えするよりも、**事実、現象を通してあなたに気づいていただくほうがはるかにうれしいのだ。なぜならあなたはその現象から先生がお伝えしたいこと以外のものまでつかむことが出来るから。**

さて、自分に問いかける。

そして先生が「現状、ピンチ」などを通してあなたに気づかせてもらう。そしてあなたが先生のお伝えしたいことに「気がつく」ようになると、意識がすっきりする。

意識がすっきりしたとき、初めてあなたは「自然と感謝」するようになる。

この作業は一生、死ぬまで行う作業である。なぜならこうして生きている間にも「記憶」が出て、あなたの純粋な感情に傷を入れてくるからだ。

感情は恐怖と絶望をあなたに見せる。あなたはそれでめげるようになり、そしてついには絶望のふちに立たされる。

で、あなたが最も力を入れていただきたいのはこの部分だ。本当に望んでいるものは必ず「モノ」に焦点を当ててではなく、「心」に焦点を当てること。

そして心が求めているものがわかれば後は好きなことをしよう。普通に生きていればいいのだ、肩の力を抜いて、はい、抜いて。

■ 流れに身をゆだねて生きる

さて、僕は何事にも感謝することが大切だと述べた。でも何事といっても人間は実際に感謝するような状態がおきないと本当に感謝なんて出来ない。

何もないときなんて感謝はしない。

でも**何もないから逆に感謝できるのだ。**

特に僕は自営業で時にマヨネーズと水だけで2日間過ごしたことがあり、その次の日におにぎり1個を食べたときはものすごく感謝をした。

あなたはそういう体験はないにしろ、こういう状態が起きて感謝するよりは普段から感謝したほうが、人生色々とお得なのだがいかがだろうか??

さて、感謝すると一般的にはうれしいことが訪れてくるといわれている。でもそれはうそだ。感謝するとますます嫌なこともいいことと同じように訪れてくる。でも、世の中面白いもので、**嫌なことというのは全て、あなたが過去に常に抱えていた記憶や過去に未練を残していたものだったりするのだ。**

要は感謝することで出てくる嫌なことは全て「未練」を断ち切るためのゴミ、膿が出ているに過ぎない。

さっき書いたけれど、人間は常に問いかけている。そして問いかけて常に先生は現実という形でヒントを出して、答えとそれ以上のものをあなたは学ぶ。

それで学んだことは二度と体験しないように出来ている。予防策も出ているし、それだけでなくあなた自身、もう味わいたいと思わないだろう。

世の中というのはそういうものだ。

そしてこれが出来ればできてくるほど、あることに気がついてくる。それは人間って自分の好きかつ、最も発揮できる分野で仕事をして回りに貢献している姿が一番うれしくて。

そして何もおきない淡々とした日常が最も素晴らしいと。実はこれがわかるようになればあなたにおきることが次々と起きてくる。僕は何度も奇跡に出会っているし、僕以外にも奇跡に遭遇している人はいる。

ただし、最後のテストがある。

それは**そういう生活を「受け入れる」か「拒否」するか**だ。実際人間は二つ受け入れるのに苦勞するものがある。

一つは辛いことや辛すぎること。

そしてもう一つは最高の自分自身。

特に最高の自分自身、成功している自分自身ほど受け入れがたいものはない、その理由は人間、成功したら困ってしまうものがあるからだ。

その困ってしまうものとは……新しいことに取り組む好奇心だ。実は成功の本質に気づくようになると、今の人生そのものが成功していることにつながる。だから、成功は追い求めるものでなく淡々と生きることになるのだ。

でもたんとんと生きることほど成功哲学の本を読んでいる人からするととても辛いことになる。なぜならあなたにとって最悪の環境こそが最高の状態だというのだから。

で、もしあなたが最悪の環境なら必ずといっていいほど、そこは確実に変わる。いや、あなたが自然と最高の環境に出向くというか。

僕自身、釧路にいたのだが、釧路だといろいろな意味で限界だった。そこで思い切りみんなから笑われて、千葉に来た、千葉に身寄りなんて誰もいないし、そもそもそういうところを選んだ。そして何とか生きている。

僕が千葉に来て学んだことはいろいろある。
しかし、今ままで学んだものでわかったことは

「**生きるときはあるがまかに生きるのが一番いい**」

ということだ。僕はこうしてあなたに自分の思いを伝えているが、あなたはどうか受け取ろうとかまわない。ただ、これを読んだ中から一人だけでも「あるがまかに生きる」生活をしていただけること。これが僕の悦びである

あなたに人生を強要するつもりは毛頭ないし、あなたの人生はどんなことであれ、最終的に決めるのはあなた自身だ。だからといって宗教や僕に心酔するのはやめていただきたい。それは依存だから。

あなたはただ一人、「心の中にいる輝いている自分」に全てをゆだねて生きていけばいいのだ。心の中の自分はあなたの求めていることもあなたの本来発揮できる

メンターは小学校1年生 続 + 5つのステップ 100 P

ものも全てにおいて知っている。あなたの余計な記憶、周りからの情報であなたが勝手に判断しているにすぎないのだ。で、それらを克服するにはほとんど、あなたにどんな過去があろうと、それらを振り返っていくしかない。

僕はただ、あなたの心とあなた自身が向き合えるための道具を作った、情報を提供したにすぎない。

そこから先はあなたの物語だ。
ぜひ、あなたのドラマチックな人生を僕に聞かせてもらいたい。

■ 終わりに

ここまでお読みいただき、有難うございます。
実際これらは全て僕の体験談であり、かなり有効性の高いものになっています。

僕自身はこの視点で見ることが出来るようになってからというもの、色々ありがたいことに恵まれています。もちろんありがたくないといわれる出来事にもあいましたが、それはすべて「気づかせてくれる」ためにおきたものとしか考えていません。

人生は塞翁が馬といいますが、本当は毎日感謝できるようになると、どういうわけかうまくいくほうが多いです。なぜそういえるのか？ それはわかりませんが、誤解を招くことを言えば、毎日感謝するとは大きな流れに身をゆだねること。あなたは観客であり、僕は舞台俳優です。そして神様って言うんでしょうかね？ そういう僕ですらわからないけれど、心の中にいる存在はそういうのを全てわかっていて、まるでドラマチック展開を見せるような出来事を毎日用意しています。観客は大体ドラマのあらすじはわかっても最終結果は見ないとわからないわけです。で、舞台俳優はただ、誰かが決めだシナリオどおりに演技をするわけです。

本当にこれだけは言えるのですが、あなたが抱えているものは全て思い込みですし、いいことも悪いことも思い通りにはなりません。

だから、言葉で悪いことを言えば悪いことが働くといっても本当に働くかといったらそうではありませんし、逆にいいことを言ったら本当にいいことが起こるのかといったらそうでもありません。

ただ、人生には大きなシナリオがあって初めから用意されている。だったらその中で好きで最も自分として発揮できる分野を探して、それに対してひたすら歩いていく。そして歩みつつ回りにも出し惜しみなく提供する。ちなみに提供するときは無料でなく有料にして下さい、なぜならやる気のない人に読ませても、興味のない人に読ませても、徒労に終わるだけですし、何よりもあなたは価値をひたすらあげなくてはなりません。

どんな人間も最終的には「あなたの成長」を買っているのです。ですからあなたは本日からどんなことがあっても自信と誇りを持って生きてください。

何、もっていなかったら回りがきちんとあなたに目にわかる形で教えてもらいますから、不安は持つ必要ありません。

せん。大切なのはどんなことがあっても身をゆだねて堂々と生きることです。そして好きなことに全精力をこめて取り掛かること、そしてそれを回りに伝えること。

そしたら周りもそれを手に入れてあなたに何倍も形となって帰ってきます。

といってもこれが発動しない条件があります。それは自分のことばかり考えること、自分の明日の生活や自分の願望ばかり考えること。

あなたの生活は周りが支えてくれているのです。それがどんなに借金まみれでもそういえます。あなたはただ、自分の最高に輝ける場所を見つけて、そこに突き進んでいく、そして周りに提供して社会に貢献すること。

あなたは生きているだけで社会貢献しているのです。ですので好きなことをしてどんどんと世の中に貢献していただける人間になっていただきたい。

それが最強の生き方だと自負しています。

■ おまけ

もしよろしければこちらを読んだ感想をいただけないでしょうか？ 感想を送っていただきますと、とある極秘レポートがあり、そちらをお渡ししたいと思っています。

レポートは秘密ですが、あなたの原点探しにはとても役立ち、それをどうビジネスに生かすのかについて書かれています。

感想はぜひこちらから送りくださいませ。

<http://www.formzu.net/fgen.ex?ID=P96263709>

ここまでお読みいただき、有難うございます。

ささ けんたろう